

北海道政策研究会

道内調査 in 道北 調査報告書

2011年5月30日-6月1日



日 下 太 朗 (団 長)
田 村 龍 治
稲 村 久 男
沖 田 清 志

木 村 峰 行 (副 団 長)
高 橋 亨
北 口 雄 幸 (事 務 局 長)

北海道政策研究会

視察のしおり

日程表 第1日目 5月30日(月)

行き先等	時間	日 程 等
士別着	12:00	士別駅集合。到着後、たぬきや食堂（士別駅前）で昼食
日甜士別工場	13:00	日本甜菜製糖(株)士別製糖所（佐藤所長対応）
	14:30	積雪寒冷の北海道にとって、ビートは必要不可欠の作物であり、輪作体系を維持する上にも重要な作物である。しかしここ数年、ビートの作付け面積が大幅に減少し、北海道農業にとって大きな課題になっている。今後の対策などについて調査研究する。
デリーサポート	14:50	(有)デリーサポート士別（玉置社長対応）
	16:15	組織参加者（23戸）が管理している個人飼料畑（草地）を一元管理し、肥培管理、収穫、更新、堆肥散布など一連の作業に加え、生産された飼料をミキシング（TMR）し、各戸まで配送する業務を行い、酪農経営の生産コスト低減と安定化を図っている。
士別市役所	16:30	士別市役所にて、地域医療などの課題について意見交換。（牧野市長対応、連合議員同席）
		地域医療の現状と医師確保対策などについて意見交換する。
士別グランドホテル	17:30	チェックイン後、マイパルスにて移動。
羊飼いの家	18:00	羊飼いの家にて意見交換懇談会
		牧野勇司市長、【連合推薦議員団】山居忠彰議長、伊藤隆雄市議、出合孝司市議、松ヶ平哲幸市議、十河剛志市議

日程表 第2日目 5月31日(火)

行き先等	時 間	日 程 等
ホテル発	09:00	士別グランドホテル発
つくも園	09:05	社会福祉法人しべつ福祉会つくも園(石井施設長対応)
	10:30	障がい者施設の運営の課題と雇用の確保。地域との交流などについて調査する。
ふうれん館	11:00	(株)もち米の里ふうれん特産館
		平成元年に7戸の農家で創業以来、現在に至るまで一貫して地元で生産される「はくちょうもち米」を利用した商品づくりにこだわり、名実ともに「もち米の里」としての地元米のPRにも貢献している。また、通年雇用の従業員も年々増加し、地域雇用の拡大にも役立っている。
ふうれん館発	12:45	視察終了後、昼食。12:45 発
美深町		美深 IC で今泉副町長、渡辺主幹と合流
トロッコ王国	13:30	トロッコ王国説明及び実車
		平成60年に国鉄美幸線が廃止となり、その跡地を活用し、平成10年7月からNPO法人「トロッコ王国美深」を開設。往復10kmの鉄道を自ら運転する体験型観光施設を運営し、昨年度は12,000人の入国者を数えている。
チーズ工房	14:30	チーズ工房羊飼(田中孝幸代表対応)
		平成19年から移住し、チーズ製造販売を手がける。開設当初は牛乳によるチーズ製造販売をしながら、最終目標として自ら羊を飼育し、土着菌による羊乳チーズの製造販売を目指している。
農場民宿	15:00	農場民宿ファームイントント(桐生佳樹氏対応)
		(宥)松山農場が、平成7年から体験型観光宿泊施設を開設。羊牧場の見学などが楽しめる。また、同社は、羊乳、ひつじアイスなどの製品販売を手がけている。
仁宇布の冷水	15:40	仁宇布の冷水(平成の名水百選:観光協会対応)
まちの駅	16:30	まちの駅(美深福祉会対応)
		廃業した呉服店舗を町が譲り受け、平成18年度からバス待合所を兼ねた交流スペースを開設。さらに本年6月からは、社会福祉法人美深福祉会が事業主体となり、販売・喫茶コーナーを開設する。(6月1日オープン予定)
チョウザメ館	17:00	チョウザメ館(美深温泉対応)
チェックイン		美深温泉
意見交換会	18:00	美深町の政策課題等について意見交換
		【意見交換会】山口信夫町長、今泉和司副町長、中野勇治町議(連合推薦議員)

日程表 第3日目 6月1日(水)

行き先等	時 間	日 程 等
美深温泉発	08:00	田村道議、沖田道議離脱
音威子府村	08:30	小規模自治体の課題について意見交換（佐近勝村長対応） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 北海道最小自治体の課題を調査し、自治のあり方について研究する。 </div>
	09:30	ライセンス制釣りと資源調査の要請を受ける <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 天塩川は、北海道第二の河川であり、河口から名寄市まで人口堰のなく、相当数のサケやカラフトマス、サクラマスが遡上しているものと思われる。しかし、その実態は把握されておらず、資源調査の必要性が訴えられている。資源調査のためには、釣り人の力を借り、ライセンス制で釣りを許可する取り組みが有効と考える。また、過疎振興の観点からも、多くの効果が期待できる。 </div>
士別	10:20	意見交換後、音威子府村出発
	12:00	士別にて解散。



【調査結果報告書】

1 日目 5月30日(月)

日本甜菜製糖株式会社土別製糖所(甜菜の安定的な作付け)

製糖所としては、原料の甜菜(ビート)の確保が最重点課題である。

昨年からはまった「戸別所得保障」は、安定した制度となるのかが心配であり、収量だけではなく面積払いも必要ではないか。甜菜への転作農家が減少している。

また、南北300kmから原料を調達するために地域ごとの課題も影響がある。

さらに、一昨年は冷湿害、昨年は高温多雨により収穫が落ち込み、糖度も下がった。

したがって、水田交付金や産地資金についても甜菜に反映すべきであり、機材への支援もお願いしたいとの要望があった。

問題点を解決し、安定的な甜菜の確保無くしては、製糖業が立ちゆかなくなってくる実態から、北海道農業の基幹作物である甜菜が、経営的に魅力的な作物となるための制度設計が必要と感じた。



有限会社ディリーサポート土別(TMRセンター)

道内TMRとしては初めて補助を受け平成13年に23戸の酪農家で発足、その後、一戸が離農したため現在22戸で運営。

22戸の草地を一元的に管理し肥培管理、収穫、更新、堆肥散布など一連の作業と併せ、生産された飼料をミキシングし、各戸まで配送する業務を行うことによって酪農経営の生産コストの低減化と安定化を図っている。

ディリーサポート土別独自に、ミキシングした飼料をプレス(圧縮)梱包をする特許を取得、このことにより、搬送時も単種類だけではなく



多種類の飼料を一度に運べるなどの省力化を図る一方、発熱が抑えられ、通常1日だったものが2日から3日程品質を保持することが出来るようになり、好評を得ている(販売により、需要拡大している)。

今後は牛・豚の育成センター(TMRセンターが育成を行うのは全国初)や新規就労のための研修農場(現在3戸が新規就農)の充実を進めていきたいとのこと。

各地にあるTMRセンターの先端に行く施設で、多農家で行うメリットを最大限活かしている施設として、特筆すべきと認識した。

士別市役所（広域医療連携と公立病院経営）

地方の公立病院として名寄市立病院と地域医療連携を行っているが、医師不足による経営の悪化が深刻な状況となっている。

平成20年に国が求めた「公立病院経営計画改善プラン」によって、一般会計120億円の予算の中から13億円の繰り入れを行い、22年度では実質9億円を繰り入れている。

道の広域連携化構想において知事はスピード感と言っているが、道が直接調整役としての役割を果たさなければ、3次医療圏の基幹病院である名寄病院と士別の関係は難しいと感じた。

士別病院も307床でスタートしたが現在170床となっており、また、市内では開業医が5件と道内では一番少なく、4月には「開業医誘致条例」を制定し、医師の確保に街をあげて努力している。医師確保、看護師の確保、診療報酬の改定を強く要望された。

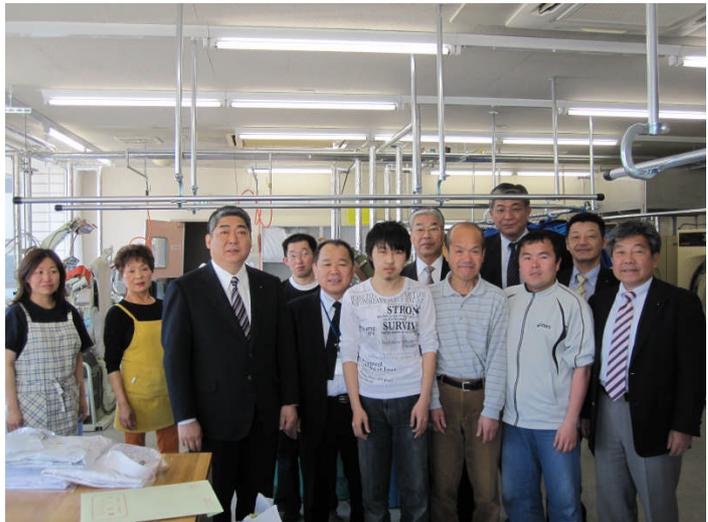


2日目 5月31日（火）

社会福祉法人しべつ福祉会：障害者支援施設つくも園（知的障がい者支援施設）

札幌に本部がある福祉法人札幌つくも園から分離して新たに社会福祉法人しべつ福祉会を設立、知的障害者を中心とした地域移行自立型の施設運営を行っている。

その中心的な施設が「ワークセンター・きずな」で、「喫茶・ランチボックス」、「食事処・結」ではウエイトレスや調理業務などを行い、食品加工場ではオードブルや弁当の注文を受け調製、福祉会各施設内の掃除・洗濯を受託し、また、市内のクリーニング店を買い取り「みつばクリーニング」として業務を行っている他、市内のリサイクルセンターにおいて資源物の分別作業なども行っており、就労を行う事により、地域での障がい者の自立へとつなげている。



併せて、「ふれあい交流館」を相談支援、レクリエーションの実施、サークル活動などの拠点施設と位置づける他、地域には貸室として開放しており、将来高齢者のデイサービス等にも利用できるよう設計している。

様々な展開をしているが、問題点も抱え、特に18才から20才までの間、経済的支援が打ち切られる制度となっていること、人材難も喫緊の課題で、若い人が地方に来たがらない、社会福祉士を取得しても三分の一が一般企業へ流れる、福祉は3Kと見られているなど今後の展望が必ずしも見えず、新法移行も含め、行政はより現実的に対処していくことが求められると感じた。

株式会社もち米の里ふうれん特産館（農業の6次産業化と地域雇用）

稲作の厳しい地域でもち米を生産していたが、当時は道産単品で「もち」や「あられ」を加工してくれる事路も無く、冬期間は出稼ぎという生活が続いた。

その当時、新潟の3農家が自ら「もち米」を加工していることを知り、その取り組みをモデルとして30代の農家7戸が集まって生産から加工までを行おうと会社を立ち上げた。

当初は農協も反対だったが、熱意で克服、農協や役場も施設や機材を提供してくれた。



農家で加工も行うのは初めてであったことから、報道関係も取材を通じて支援をしてくれたこともあり、事業は順調に推移、出稼ぎをする必要もなくなり、地域の雇用へも貢献出来るようになった。

北海道農業サロンのご縁で、モスバーガーの専務から甘いものを販売したいという提案が有り、お汁粉に「はくちょうもち米」を使用、全国展開に広がった。

平成20年には、道の駅「もち米の里 なよろ」の指定管理者となり、自社の様々なもち製品を提供している他、製品を納入している企業も増え、材料としても多くの業者が「はくちょうもち米」を使用してくれるまでになったことは、まさしく農業の6次産業化のモデルとして、多くの示唆を与えてくれる企業である。

トロッコ王国及び周辺振興策（廃止路線活用、Iターン、農場民宿）

昭和60年、国鉄美幸線が廃止され、その後鉄路が放置されていたが、その鉄路を利用した体験型観光に着目した地元有志がNPO法人を立ち上げ、往復10kmの鉄路をトロッコを自ら運転することにより自然豊かな森林を駆け抜ける体験をする施設として再生し現在に至る。

年間約1万人以上の来客が有り、訪れる人々を楽しませてくれている。

実際に試乗してみるとスピード感があり、自然の風を受けて緑を駆け抜ける爽やかさは老若男女誰もが楽しめ、リピーターも多いことが想像できる。また、このような活用は、様々な地域でも可能ではないかと感じた。



Iターンで北海道美深町においてチーズ工房を始めたのは、埼玉県からの田中さんだ。

平成19年に脱サラ移住で美深に入植、原野を開墾してチーズ工房を手作りで建設、平成21年に工

房を本格的に運営、現在は牛乳からのチーズ制作だが、近い将来には羊乳でのチーズ作りを目指している。

トロッコ王国に隣接していることから、来客の憩いの場としての位置づけも期待できる。

また、「民宿農場ファームイントント」は、近くに富士重工業（スバル）のテストコースが出来たため、冬期間の来客が見込めるとして開設。

民宿の周囲には数千本の白樺林が有り、この白樺から樹液を採取して「森の雫」として販売、販路も大きく広がっている。

農場自体は綿羊を飼育しており、近年は羊肉が脚光を浴びていることから値も上がっているが、肉の部位ごとの注文が多く、採算割れも起こしていることから繁殖を抑えているとのこと。

農業体験の民宿とは少し趣きが違うため、今後の成り行きが多少心配ではあった。

まちの駅（障がい者自立支援と住民交流の促進）

知的障がい者が自立に向けて生活支援と就労支援を受けながら、併せて町民の交流の場を提供することでまち中へ賑わいを持ち込もうと、中心地のバス停前に「まちの駅」を開設した。

開設は社会福祉法人美深福祉会で、休憩・交流の場と障がい者の就労支援の機会の提供として、喫茶を含めたサロン機能、地場産品の販売と授産施設の製品の展示販売を行うサテライトショップ機能、地域情報の発信をするまちの駅機能、高齢者・障害者の相談業務を行う相談支援機能という4つの目的



をもった施設であり、私たちが視察した時はちょうど明日開店という忙しさの中での訪問だったが、一つの施設に多機能な目的を備えた施設として、今後の展開に大きな示唆を与える非常に楽しみな施設であると思う。

株式会社美深振興公社・美深アイランド（チョウザメの孵化とキャビアの商品化）

昭和初期まで天塩川ではチョウザメが生育していたことから、天塩川の三日月湖を利用してチョウザメを放流し、希少価値のキャビアを生産しようとする構想が生まれ、昭和58年に水産庁養殖研究所から積雪寒冷地に適しているベステル種300尾を譲り受けて放流、試行錯誤を重ねながら取り組みを始めてから26年後の平成21年にやっとキャビアの商品化に成功、キャビアは抱卵までに8～10年かかることから、なかなか事業家を行う業者はいなかったが、今では毎年4kgから8kgほどをフランス料理店やホテルなどに提供しているとのこと、生憎、訪問時は抱卵の季節ではなかったこと



ことから賞味ができなかったが、これからの事業展開が大いに期待できるものと思う。

3 日目 6月1日(水)

音威子府村役場(小規模自治体の実態と課題)

音威子府村は人口995人という道内最小の自治体で、公共事業で作業を行っている人を除けば、850人の自治体である。

診療所は一カ所で、平成25年までの契約があるが、村の一般会計17億円の内、5千万円を負担していることから、村で医療を確保するのは限界にきているようだ。

また、少子化もスピード化しており、小学校16名・中学校17名は本校でありながら併置校となっている。運動会も幼稚園、小学校、中学校の合同開催である。



主産業は「そば」の栽培で、戸別所得保障が良い方向となっていることにより多少なりとも収入の「モラルハザード現象」がおきている。

高齢化も進み、特養は必要な施設となっているが、病院の二階に設置しているため支援制度が無く、何とか定住自立権構想で対処してもらえないかお願いしているとのこと。

議員も6人で、議長・副議長・委員長・監査を除けば2名となり、これでいいのかも議論が必要と言う。

高校は美術工芸高校があり、117名が全国から集まっている。全寮制でレベルも高く、村の重要な教育・文化資源となっている。

また、森林や川などの恵まれた自然環境を生かした観光で、村を活性化したいとしている。

NPO法人 eco おといねっぶ(ライセンス制釣りと資源調査)

天塩川は河口から名寄市まで人工の堰がないため相当数のサケ、カラフトマス、サクラマスが遡上しており、孵化場までは相当魚影が濃い状況となっている。

この利点を生かし、ライセンス制での釣りを行えるよう取り組みを要請している。

5月から11月まで、魚種ごとに期間を設定し、区間を4カ所ほどに限定して、キャッチアンドリリース方式として年間9千人ほどの釣り人を想定。



ライセンス料は一日券からシーズン券まで用意し、一定の料金を徴収、観光にも結びつけることができ、雇用にも創出できる構想だが、問題は、水産資源保護法と北海道内水面漁業調整規則がネックとなっている。

しかし、法も規則も、知事の許可で対応でき、道がこれらの支援を行えば、実現が可能となってくる。地域が活性化のために努力しており、私達も何とか対応していく方策を考えなければと感じた。

